

振り返り今思う

永山渡(ペンネーム)



僕は現在、部屋(居場所)がある生活をしています。ホームレスの時は人や時間を気にして落ち着ける場所などありませんでした。正直、眠りから覚めると生きている事がとても残念に思えたものです。死ぬ度胸がなかった自分の存在が消えて無くなれば良いのにといつも願っていました。それは、この様な状況に陥ってしまったのは、自分の責任だから何か出来る事からやらなければならぬと頭で解っていても、心(気持ち)がまったくついてこない日々が続いたからです。

取り敢えず何をするにもお金が必要ですが、僕の個人的な考えですが、会社については少し疑問を感じた部分もありましたが、唯一(社会(一般の方)と接する事が出来、お金を得る事が出来る手段として路上でのビッグイシューの販売を始めました。そうすると色々なお客様に励まし応援していただきました。

多くかけていた言葉は「頑張ってや」「大丈夫?」などでした。素直にその言葉を受け取れない嫌な自分の時は、何をどの様に頑張れば良いのか?大丈夫と聞かれ大丈夫ではないと言え

るはずがないと心で何か奇立ちに似た感情を持ちたりもしました。しかしチョットした会話の中に自分ごと

きを感じて下さる方がいる事に喜びや、社会復帰をしたいと思う自分の活力になった事は、紛れもない事実です。

人は自分自身で変わろうとしないと、変わる事は出来ないわけですから、そういった部分で色々な方に後押しをしていただけました。とても嬉しい体験でした。ありのままの僕を否定する事なくその瞬間を受け入れて下さった方々のおかげで今日の自分があります。色々な方との関わりの中で、ぼんやりとですが、自分がいても良い(生きていても良い)と感じた事は、これからの糧になりました。

また、きれいな事だけではなく、お金がないと何も出来ない事も現実です。個人的には、適度なお金と受け入れてくれる人がいれば人間は何となく、安心する事が出来、頑張れる様な事を学んだ時期でした。どんなに強がっても独りで生きていく自信は僕には、ありません。人との関わりを持って、やっと社会復帰が出来た様な気がします。僕は、まだまだその途上ですが...



かれ大丈夫ではないと言え

なにわ路情

野宿考ジャーナル
16号(季刊)

「なにわ路情」がめざすもの

- 野宿生活者の生活や声をとりあげ、ともに考える新聞です。
- 脱野宿のきっかけとなるような紙面づくりを心がけています。
- 今までのこと、そしてこれからのこと、いっしょに考えていきたいと思います。

なかのしま路情編

なかのしま

ろじょうへん

くろしほばさ 佐々木敬明

五月二十七日の日曜日、その日「路情新聞」配布はぼく一人でした。中ノ島はバラを見る観客たちで賑わっていました。彼らの視線を一手に浴びながら、バラ園の奥深く、あるいはパイプをとり越え川岸へ、はたまた犬にはえられながら中ノ島およびその周縁を周遊してきました。以下はその日のレポート「あらまし編」なかのしま路情編」をご紹介します。

1 あらまし編

一三時二〇分 中ノ島本島(バラ園から剣先まで)配布。

留守テントが多く、ここで雑談を三名しました。それにしても、「A橋」の植え込み奥テント群で飼われている、犬のけたたましさはいつもながらものすごいんです。犬の数も増えているみたい。犬の喧騒に、たくさんいるくそギャラリーたちが視線を向けてくる。以前は当事者も親しく中に入れてくれたけれど、今は殺伐とした雰囲気です(約五年前、ある野宿女性の要望で真昼間その女性を「拉致」し、某所へ避難させたことがある思い出の場ではあるのですが)。

一四時 堂島川岸配布スタート
ここでは懐かしい人にあいました。本論で紹介します。ここでの雑談は三人です。

一四時四〇分 裁判所前配布スタート
川岸のテントは少なくなっているけれど、裁判所前は以前のように活気がとり戻しているみたいです。テントが多い。ここでの聞き取りはなし。

一五時五〇分 天満緑道配布スタート

2 なかのしま路情編

※雑談はすべて仮名。Sは佐々木です。

■ 真木克治さん(昭和一八年生)

M 空き缶をあつめているんですけど、あまり集まらないね。仕事はしたいと思うけど、なかなかそのきつかけがなくてね。身体は今のところ



は健康です。

■ 岸村光雄さん(昭和二一年生)

K 月二回ぐらい仕事をしるけどね。

S どんな仕事やってはんのん?

K 特掃や。

S じゃあ西成まで行きはんねんや。

K そう。足が悪いからあんまり出らん。仕事してるときは忘れるんやが、仕事が終わってこっちへ帰ってるときは、もう痛くて足を引かずして痛風かなにか?

K いや、むかし凍傷にかかったことがあるんや。これがなかったらも

うちょっと仕事が出来んやけど。ああ、病院には行ってるよ。

S 時間的にはフルタイムではなく、比較的自由な仕事があればええんやね。

K いつも時間がきつい仕事は足に駄目やけど、多少余裕があればありがたい。

S そんな仕事があれば持ってくる。すぐには期待せんといてや。

K かめへん、かめへん。頼みます。岸村さんは長いひげをなびかせ、足の悪さをしきりに悩んでいた。これさえなければなあって言うように。

■ 蓮本秀雄君(昭和四三年生)

S 缶集めかなんかやってるのん?

H そうですね。あんまり多くないけど。

S そろそろ上にあがるうか?

H そう思っているんですけど...

S 君は未だ若いんやから、早いうちにやっておかん。僕は仕事づくりを本業にしているから、フィットする仕事があれば持てようかね?

H 今僕んとこに同居人(女性)がいるんです。いろいろ片付けなあかんこともあるし、うまく仕事が出来るかどうかな...

S ひとつつつ片付けていかなしやうがないやん。

H そうですね。お願いします。

S 有ればこちらに来るようにします。

三〇代の蓮本君は人懐っこい顔を

紙面

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1 なかのしま路情「雑談閑談」 | 3 ホームレス自立支援の状況を日本地図に |
| 2 ペット・ロスのはなし | 4 連載・路上から路情へ(第二回)振り返り今思う |
| 2 和歌山夜回りの会・ふれあいの会の支援活動 | 4 漫画「ナナコロピヤオキな人々」 |
| 3 なかのしま路情「雑談閑談」(続き) | 4 ひとくちギャラリー |

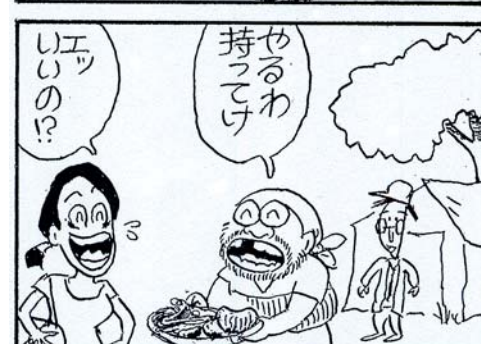
発行元 なにわ路情編集局

〒530-8090 大阪中央郵便局留
「なにわ路情編集局」係
tel 080-3767-7989
e-mail rojoinfo@zap.att.ne.jp
http://www.naniwa-rojo.com/

郵便振替口座番号
00900-5-222740 なにわ路情編集局

ナナコロピヤオキな人々

by ありむら潜



THE BIG ISSUE JAPAN

ホームレスの仕事をつくり自立を応援する、ビッグイシュー日本です。
雑誌販売に興味ある方は下記までお問合せ下さい。

■連絡先:
06-6344-2260
■住所:
大阪市北区堂島2-3-2堂北ビル4F



就労支援をNICEと協働に応援します

ひとくちギャラリー

イラスト・詩・短歌など
なんでも投稿募集中!



高瀬君は、映画や音楽が好きで、僕らと話をするときは決まってその話になります。イラストを描くのも得意で、今号への投稿を希望したので掲載いたします。絵のタッチがすごく繊細です。(さ)

編集後記



残暑とともに「なにわ路情」をお届けいたします。今号では新聞配布時に聞こえた「当事者の声」を大きく取り上げました。実際の野宿生活者数からすればわずかでしかありませんが、就労を希望する声、病気に悩む声、他の困難な事情を訴える声など、一人ひとり違った声が聞こえてきます。

現在、編集スタッフは全国の支援団体への聞き取りを行っております。団体に属さない読者の皆さんからも、「こういう声が聞こえる」というお話がございましたら是非とも寄せてください。(け)

ペット・ロスのほなし



『天王寺詣り』という落語をご存知ですか？お彼岸でにぎわう天王寺さんに出かけて、死んだクロという犬のために引導鐘（いんどうかね）をついてもうお話。この落語の主人公、親の命日はまったく覚えてないのですが、クロの命日だけは決して忘れることがないというたいへん立派な犬孝行者として描かれております。かくいう私も坊さんのひとりとしてまして犬猫はもちろんのこと、何度かフエルトだとかハムスターといった、小動物のための弔いに立ち会わせてもらった経験があります。昔から、「一寸の虫にも五分の魂」といいますから、二寸以上のペッ



ペットの供養碑「獣魂碑」
（環境事業局・木津川事務所）

トならば十分な仏性（ぶつしょう）もそなわっていることでしょう、とまあ、落語もどきの説教はおいときまして。ペットも寄り添い、連れ添ううちに、家族。。。いえ家族よりもっと愛着のある存在になるのであります。お経を読みながら、喪主さん（？）というのか飼主さんですが、の辛さが、背中越しに痛いほど伝わってきたこともありまして。野宿生活をされている中にも、ペットを飼われる人は多いですね。番犬にもなるし、なにしろ身も心も凍える冬にはいっしょに寝るにあつたかい。イロイロな功德（くどく）を授けてくれます。けれど、野宿される

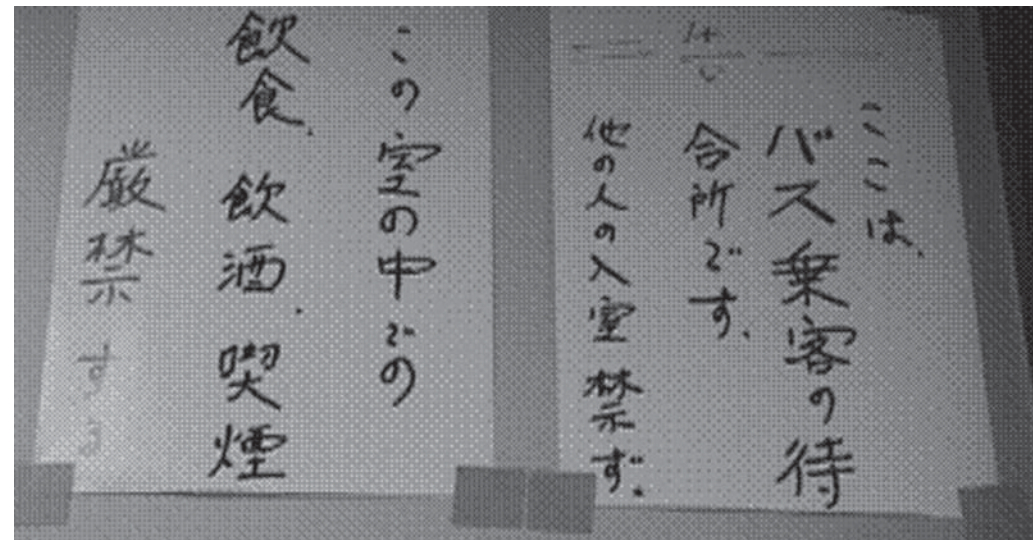
方の中で「飼っていた動物が亡くなったときは、某公園のお墓に埋める」と言われるのを耳にしたことがあります。某公園には、放し飼いの犬や捨て猫がたくさんいて問題になっています。それらの動物たちが、命を終えて自然に還（かえ）りていく動物たちの「天王寺」になっているのでしょうか。大正区南恩加島にある、環境事業局の木津川事務所では、亡くなったペットの引き取りをしています。五キログラムまでの小動物なら、一七〇〇円。一〇キログラム以上の中型動物なら、二八〇〇円の手数料がかかりますが、春秋のお彼岸には、動物愛護協会の人たちがお坊さんを伴って、ペットたちの供養をされているそうです。自立支援センターに入所するために、泣く泣くご自分のペットの世話を仲間（な）に託した方も多いことでしょう。その後、さいわいなことにペットが飼えるアパートをみつめて、再び生活を共にしたというお話しも聞きます。いづれにせよ、愛するものとお別れ「愛別離苦（あいべつりく）」は、いきとしけるものにとつて大切な問題ですね。（か）

環境事業局木津川事務所
電話 六五五一・一七三〇（日曜日休み）

和歌山夜回りの会 ふれあいの会の支援活動



野宿生活者問題は、大都市だけでなく地方都市の問題でもある。和歌山県の野宿生活者は、和歌山市に集中している。二〇〇六年五月現在で約五〇人。ピーク



（上）「野宿生活者向け」と思われる掲示
（中）支援の拠点、夜回りの会・ふれあいの会（下）橋の下の野宿現場（和歌山の特色のひとつ）

は二〇〇二年夏で約八〇人。主な野宿地は、橋下、河川敷、JR和歌山および南海和歌山市の各駅周辺、和歌山城、公園など。河川・和歌山城を除き、テント層が少

上がった後の生活づくり支援を行っている。再野宿はほとんどいない。「野宿生活者問題は、単に野宿生活から脱却するだけではすまない、量に上がった後の関わり合いが重要である」と、代表の太田さんは語る。

活動をより活発かつ円滑に進めていくためにNPO法人格の取得を検討している。

※なにわ路情編集スタッフは、いま各地の支援団体の聞き取りを行っています。（な）

（一面のつづき）

中ノ島北岸（堂島川で志井和夫君に会う。某橋下河川敷に複数のテントがある。以前から比べると少なくなっているが、その一軒に志井君がいた。

■志井和夫君（昭和三〇年五月一四日生）

S こんにちは！
S はい。
S 新聞持ってきました。読んでやってください。
S はいはい（と）いって出てくる。
S あれ、ここに居てたん？
S ひさしぶりやなあ。
S へへ、ここにちわ。
S ここはいつから？前は此のテント違う人がいてたよね。
S そう。ここの人は保護を受けて、それで僕が此のテントを譲ってもらってん。昨年暮からここに来てんねん。
S そうなんや。いまだうしてるん。缶集めしてるんか？俺、これから天満の方にいこうと思てたんや。
S あ、そう。あそこはうるさくてね。それに比べたらここは静かで落ち着きます。缶集めはしてますよ。
S あそこは人通りがあるもんね。それにしても長いつきあいやね。
S そうですね。



S 当面はここから通勤と

いうことにして、仕事の意欲はある？
S ありますよ。したいです。清掃やビルメンテの仕事が多いけど、製造工場の軽作業みたいなものもあるから。今度持ってくるわ。ただ君の場合外が長いから、フルタイムの仕事がうまくいくかな。そんなことも検討しながらやらんかね。
S お願いします。
S 何時ごろ来るのんが一番いい？
S お昼ごろならいてますよ。夜は八時頃から缶集めに出るんで。
S O K。今頃から夕方までの間やね。
S 志井君は約七年前、「センターおおよど」に入寮していた。僕が巡回相談をしていた頃入寮し、いつの間にか自主退所していた。その

■岸田義雄さん

ちようど中ノ島の対岸にある位置でテント生活している。
S 福祉関係の人は来ますか？
K このころはあんまりけえへんな。二年前位は炊き出しに來いとか、チラシを配りに來たりしとったけど。教会とかO O党とか違うん

かな。都合のええ時だけだな。
S 変なんもきたやろ。
K 飯食わしたるとか、戸籍を教えろとか言うのんがちょこちょこ来よった。けどわしは行けへんかった。知り合いも行きよったけど、部屋に閉じ込められて外出できんようにさせられ、偉い目におおて逃げ出して来よったで。おかしなんばかりやからあんまり信用できん。この辺にも教会にいてるやつがいてるけどな。なんか怪しげなことしてるん違うんかな。間に入って儲けたりしてるやつなんか

平本さんのように諸事情を抱え、仕事から見放されていく男たちがたくさんいる。立ち話をすればするほど、男たちの現実があまりにだされる。彼らも私も「仕事、仕事」と、それがまるで不文律のように呪文化し、相変らず「男を背負い稼ぎが大切と強制する。だから昔と何も変わらない。それほど就労が大事なことになるのか。むしろ就労を楽しむ土台づくりというか、一人ひとりの見失った夢の発掘こそが当事者の独立を支援することではないのか。アイルランドのロックグループ「U2」の曲（シルバー・ゴールド）の一部を引用する。「隊長や王たちが輝くものを持っていく。俺には何もありません。それが一番の財産さ。自由を与えろ！」。

ところで、野宿者を支援している人たちが大阪市内でどのくらいいるのだろう。たとえば一〇〇人いたとして。一人の支援者が当面一〇人の独立にかかわるとしたら一〇〇〇名のケアができるんやね。本気で「一人一〇名独立運動」を始めたら面白いかもね。

このあと裁判所前で配布し、最後に旧松坂屋前天満緑道（テントがほんとに少なくなりました）で作業を終えた。



日本の公的セクターにおける野宿生活者支援の都道府県、市別の実態

●連載 路上から路情へ(第2回)

振り返り今思う

永山渡(ペンネーム)



僕は現在、部屋(居場所)がある生活をしています。ホームレスの時は人や時間を気にして落ち着ける場所などありませんでした。正直、眠りから覚めると生きている事がとても残念に思えたものです。死ぬ度胸がなかったで自分の存在が消えて無くなれば良いのといったも願っていました。それは、この様な状況に陥ってしまったのは、自分の責任だから何か出来る事からやらなければならぬと頭で解っていても、心(気持ち)がまったくついてこない日々が続いたからです。

取り敢えず何をするにもお金が必要ですから、僕の個人的な考えですが、会社については少し疑問を感じた部分もありましたが、唯一(社会(一般の方)と接する事が出来、お金を得る事が出来る手段として路上でのビッグイシューの販売を始めました。そうすると色々なお客様に励まし応援していただきました。

多くかけていただいた言葉は「頑張ってや」「大丈夫?」などでした。素直にその言葉を受け取れない嫌な自分の時は、何をどの様に頑張れば良いのか?大丈夫と聞かれ大丈夫ではないと言え

るはずがないと心で何か奇立ちに似た感情を持ちたりもしました。しかしチョットした会話の中に自分ごと

きを感じて下さる方がいる事に喜びや、社会復帰をしたいと思う自分の活力になった事は、紛れもない事実です。

人は自分自身で変わろうとしないと、変わる事は出来ないわけですから、そういった部分で色々な方に後押しをしていただけた事は、とても嬉しい体験でした。ありのままの僕を否定する事なくその瞬間を受け入れて下さった方々のおかげで今日の自分があります。色々な方との関わりの中で、ぼんやりとですが、自分がいても良い(生きていても良い)と感じた事は、これからの糧になりました。

また、きれいな事だけではなく、お金がないと何も出来ない事も現実です。個人的には、適度なお金と受け入れてくれる人がいれば人間は何となく、安心する事が出来、頑張れる様な事を学んだ時期でした。どんなに強がっても独りで生きていく自信は僕には、ありません。人との関わりを持って、やっと社会復帰が出来様な気がします。僕は、まだまだその途上ですが...



かれ大丈夫ではないと言え

http://www.naniwa-rojo.com/

なにわ路情

野宿考ジャーナル
16号(季刊)

「なにわ路情」がめざすもの

- 野宿生活者の生活や声をとりあげ、ともに考える新聞です。
- 脱野宿のきっかけとなるような紙面づくりを心がけています。
- 今までのこと、そしてこれからのこと、いっしょに考えていきたいと思います。

ななコロピヤオキな人々

なかのしま

ろじょうへん

くろしだて 佐々木敬明

五月二十七日の日曜日、その日「路情新聞」配布はぼく一人でした。中ノ島はバラを見る観客たちで賑わっていました。彼らの視線を一手に浴びながら、バラ園の奥深く、あるいはパイプをとり越え川岸へ、はたまた犬にはえられながら中ノ島およびその周縁を周遊してきました。以下はその日のレポート「あらまし編」なかのしま路情編」をご紹介します。

1 あらまし編

一三時二〇分 中ノ島本島(バラ園から剣先まで)配布。

留守テントが多く、ここで雑談を三名しました。それにしても、「A橋」の植え込み奥テント群で飼われている、犬のけたたましさはいつもながらものすこいです。犬の数も増えているみたい。犬の喧騒に、たくさんいるくそギャラリーたちが視線を向けてくる。以前は当事者も親しく中に入れてくれたけれど、今は殺伐とした雰囲気です(約五年前、ある野宿女性の要望で真昼間その女性を「拉致」し、某所へ避難させたことがある思い出の場ではあるのですが)。

一四時 堂島川岸配布スタート
ここでは懐かしい人にあいました。本論で紹介します。ここでの雑談は三人です。

一四時四〇分 裁判所前配布スタート
川岸のテントは少なくなっているけれど、裁判所前は以前のように活気がとり戻しているみたいです。テントが多い。ここでの聞き取りはなし。

一五時五〇分 天満緑道配布スタート

2 なかのしま路情編

※雑談はすべて仮名。Sは佐々木です。

■ 真木克治さん(昭和一八年生)

M 空き缶をあつめているんですけど、あまり集まらないね。仕事はしたいと思うけど、なかなかそのきつかけがなくてね。身体は今のところ



は健康です。

■ 岸村光雄さん(昭和二一年生)

K 月二回ぐらい仕事をししてるけど、どんな仕事やってはんのん?
S どんな仕事やってみてはんのん?
K じゃあ西成まで行きはんねんや。
S そう。足が悪いからあんまり出らん。仕事してるときは忘れるんやが、仕事が終わってこっちへ帰ってるときは、もう痛くて足を引かずして痛風かなにか?
K いや、むかし凍傷にかかったことがあるんや。これがなかったらも

■ 蓮本秀雄君(昭和四三年生)

S 缶集めかなんかやってるのん?
H そうですね。あんまり多くないけど。
S そろそろ上にあがるうか。
H そう思っているんですけど...
S 君は未だ若いんやから、早いうちにやっておかん。僕は仕事づくりを本業にしているから、フィットする仕事があれば持てようかかね?
H 今僕んとこに同居人(女性)がいるんです。いろいろ片付けなあかんこともあつて、うまく仕事が出来るかどうかな...
S ひとつつつ片付けていかなしやうがないやん。
H そうですね。お願いします。
S 有ればこちらに来るようにします。

三〇代の蓮本君は人懐っこい顔を

紙面

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1 なかのしま路情「雑談閑談」 | 3 ホームレス自立支援の状況を日本地図に |
| 2 ペット・ロスのはなし | 4 連載・路上から路情へ(第二回)振り返り今思う |
| 2 和歌山夜回りの会・ふれあいの会の支援活動 | 4 漫画「ナナコロピヤオキな人々」 |
| 3 なかのしま路情「雑談閑談」(続き) | 4 ひとくちギャラリー |

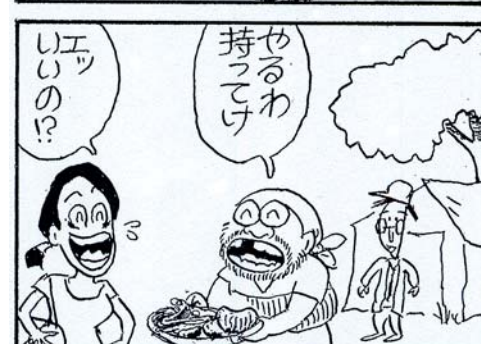
発行元 なにわ路情編集局

〒530-8090 大阪中央郵便局留
「なにわ路情編集局」係
tel 080-3767-7989
e-mail rojoinfo@zap.att.ne.jp
http://www.naniwa-rojo.com/

郵便振替口座番号
00900-5-222740 なにわ路情編集局

ナナコロピヤオキな人々

by ありむら潜



THE BIG ISSUE JAPAN

ホームレスの仕事をつくり自立を応援する、ビッグイシュー日本です。
雑誌販売に興味ある方は下記までお問合せ下さい。

■連絡先:
06-6344-2260
■住所:
大阪市北区堂島2-3-2堂北ビル4F



就労支援をNICEと協働に応援します

ひとくちギャラリー

イラスト・詩・短歌など
なんでも投稿募集中!



高瀬君は、映画や音楽が好きで、僕らと話をするときは決まってその話になります。イラストを描くのも得意で、今号への投稿を希望したので掲載いたします。絵のタッチがすごく繊細です。(さ)

編集後記



残暑とともに「なにわ路情」をお届けいたします。今号では新聞配布時に聞こえた「当事者の声」を大きく取り上げました。実際の野宿生活者数からすればわずかでしかありませんが、就労を希望する声、病気に悩む声、他の困難な事情を訴える声など、一人ひとり違った声が聞こえてきます。

現在、編集スタッフは全国の支援団体への聞き取りを行っております。団体に属さない読者の皆さんからも、「こういう声が聞こえる」というお話がございましたら是非ともお寄せください。(け)

ペット・ロスのほなし



『天王寺詣り』という落語をご存知ですか？お彼岸でにぎわう天王寺さんに出かけて、死んだクロという犬のために引導鐘（いんどうかね）をついてもうお話。この落語の主人公、親の命日はまったく覚えてないのですが、クロの命日だけは決して忘れることがないというたいへん立派な犬孝行者として描かれております。かくいう私も坊さんのひとりとしてまして犬猫はもちろんのこと、何度かフエルトだとかハムスターといった、小動物のための弔いに立ち会わせてもらった経験があります。昔から、「一寸の虫にも五分の魂」といいますから、二寸以上のペッ



ペットの供養碑「獣魂碑」
（環境事業局・木津川事務所）

トならば十分な仏性（ぶつしょう）もそなわっていることでしょう、とまあ、落語もどきの説教はおいとくまじ。ペットも寄り添い、連れ添ううちに、家族。。。いえ家族よりもっと愛着のある存在になるのであります。お経を読みながら、喪主さん（というのか飼主さんですが）の辛さが、背中越しに痛いほど伝わってきたこともありまして。野宿生活をされている中にも、ペットを飼われる人は多いですね。番犬にもなるし、なにしろ身も心も凍える冬にはいっしょに寝るにあつたかい。イロイロな功德（くどく）を授けてくれます。けれど、野宿される

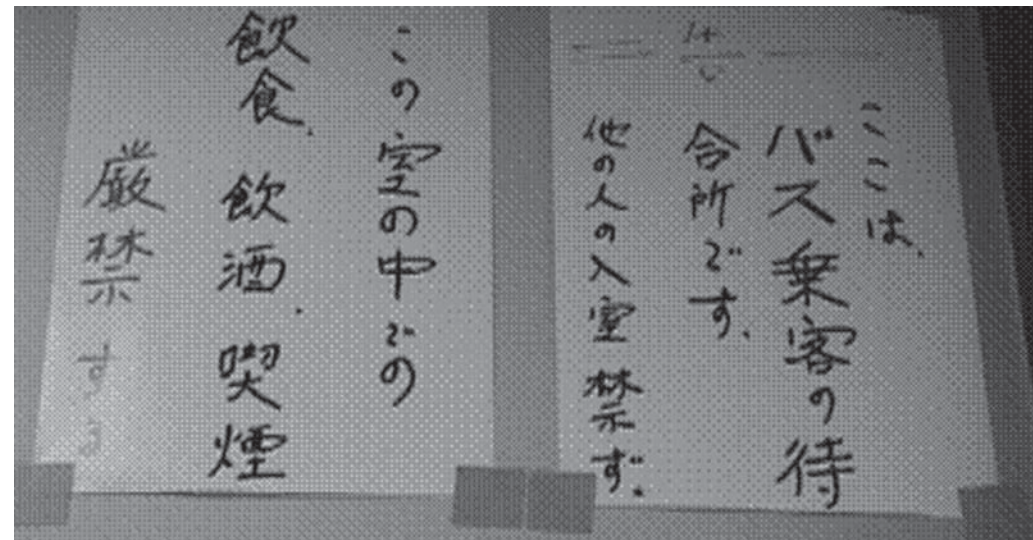
方の中で「飼っていた動物が亡くなったときは、某公園のお墓に埋める」と言われるのを耳にしたことがあります。某公園には、放し飼いの犬や捨て猫がたくさんいて問題になっています。それらの動物たちが、命を終えて自然に還（かへ）りてくる動物たち（動物たちの天王寺）になっているのでしょうか。大正区南恩加島にある、環境事業局の木津川事務所では、亡くなったペットの引き取りをしています。五キログラムまでの小動物なら、一七〇〇円。一〇キログラム以上の中型動物なら、二八〇〇円の手数料がかかりますが、春秋のお彼岸には、動物愛護協会の人たちがお坊さんを伴って、ペットたちの供養をされているそうです。自立支援センターに入所するために、泣く泣くご自分のペットの世話を仲間（な）に託した方も多いことでしょう。その後、さいわいなことにペットが飼えるアパートをみつめて、再び生活を共にしたというお話しも聞きます。いづれにせよ、愛するものとお別れ「愛別離苦（あいべつりく）」は、いきとしけるものにとつて大切な問題ですね。（か）

環境事業局木津川事務所
電話 六五五一・一七三〇（日曜日休み）

和歌山夜回りの会 ふれあいの会の支援活動



地方都市での取り組み（一）
野宿生活者問題は、大都市だけでなく地方都市の問題でもある。和歌山県の野宿生活者は、和歌山市に集中している。二〇〇六年五月現在で約五〇人。ピーク



（上）「野宿生活者向け」と思われる掲示
（中）支援の拠点、夜回りの会・ふれあいの会（下）橋の下の野宿現場（和歌山の特色のひとつ）



はないという印象をもった。和歌山夜回りの会代表：太田勝（が）一九九九年から支援活動を行っている。主な内容は、毎水曜日の夜回り（おにぎりや必要物品の配布）、毎土・日曜日のおにぎり配布、炊き出しカトリック教会（カトリック）の他、生活保護申請支援、アパート確保支援（敷金貸し付けなど含む）。市内の野宿生活者ひとりひとりの状態を把握している。夜回り記録は八〇〇頁を超える。元野宿生活者による連帯組織「ふれあいの会」による「量」に上がつた後の生活づくり支援を行っている。再野宿はほとんどいない。「野宿生活者問題は、単に野宿生活から脱却するだけではすまない、量に上がった後の関わり合いが重要である」と、代表の太田さんは語る。活動をより活発かつ円滑に進めていくためにNPO法人格の取得を検討している。 ※なにわ路情編集スタッフは、いま各地の支援団体の聞き取りを行っています。（な）

（一面のつづき）

中ノ島北岸（堂島川で志井和夫君に会う。某橋下河川敷きに複数のテントがある。以前から比べると少なくなっているが、その一軒に志井君がいた。

■志井和夫君（昭和三〇年五月一四日生）

S こんにちは！
S はい。
S 新聞持ってきました。読んでやってください。
S はいはい（と）いって出てくる。
S あれ、ここに居てたん？
S ひさしぶりやなあ。
S へへ、ここにちわ。
S ここはいつから？前は此のテント違う人がいてたよな。
S そう。ここの人は保護を受けて、それで僕が此のテントを譲ってもらってん。昨年暮からここに来てんねん。
S そうなんや。いまだうしてるん。缶集めしてるんか？俺、これから天満の方にいこうと思ってたんや。
S あ、そう。あそこはうるさくてね。それに比べたらここは静かで落ち着きます。缶集めはしてますよ。
S あそこは人通りがあるもんね。それにしても長いつきあいやね。
S そうですね。

S 当面はここから通勤と



いうことにして、仕事の意欲はある？
S ありますよ。したいです。清掃やビルメンテの仕事が多いけど、製造工場の軽作業みたいなものもあるから。今度持ってくるわ。ただ君の場合が長いから、フルタイムの仕事がうまくいくかな。そんなことも検討しながらやらんかね。
S お願いします。
S 何時ごろ来るのんが一番いい？
S お昼ごろならいてますよ。夜は八時頃から缶集めに出るんで。
S O K。今頃から夕方までの間やね。
S 志井君は約七年前、「センターおおよど」に入寮していた。僕が巡回相談をしていた頃入寮し、いつの間にか自主退所していた。その

後再テント者として巡回活動の中で発見し、〇一年に催された「再テント者調査」実行のきっかけになった人でもある。当時四〇代の半ばだったからもう五〇歳を越えただろう。川崎橋東のベンチを住みかにし、ほとんどそこを動かず野宿生活をしていた。今度こそ仕事につなげたいと考えている。

■岸田義雄さん

ちようど中ノ島の対岸にある位置でテント生活している。
S 福祉関係の人は来ますか？
K このころはあんまりけえへんな。二年前位は炊き出しに来いとか、チラシを配りに来たりしってたけど。教会とか〇〇党とか違うんか？
S 岸田さんは身なりもこぎれいで、テント周辺を掃除している最中だった。結構長い間おしゃべりしてくれたが、訪問者には不信任感を持っている。他者へのまなざしが厳しい。

■平本啓三さん（生年不詳）

某橋下に生活する。
S いつもは缶集めをしてはるん？
H これまで体が悪かったの、あまり無理は出来なかったですが、これからは仕事をしたいですね。
S 今の体調はどう。仕事がつくれたら話に來ていいですか。
H まあまあです。是非お願いします。

かな。都合のええ時だけきてな。
S 変なんもきたやろ。
K 飯食わしたるとか、戸籍を教えろとか言うのんがちょこちょこ来よった。けどわしは行けへんかった。知り合いも行きよったけど、部屋に閉じ込められて外出できんようにさせられ、偉い目におおて逃げ出して来よったで。おかしなんばかりやからあんまり信用できん。この辺にも教会にいてるやつがいてるけどな。なんか怪しげなことしてるん違うんかな。間に入って儲けたりしてるやつなんかがある。

平本さんのように諸事情を抱え、仕事から見放されていく男たちがたくさんいる。立ち話をすればするほど、男たちの現実があまりにだされる。彼らも私も「仕事、仕事」と、それがまるで不文律のように呪文化し、相変らず「男を背負い稼ぎが大切と強制する。だから昔と何も変わらない。それほど就労が大事なことになるのか。むしろ就労を楽しむ土台づくりというか、一人ひとりの見失った夢の発掘こそが当事者の自立を支援することではないのか。アイルランドのロックグループ「U2」の曲（シルバー・ゴールド）の一部を引用する。「隊長や王たちが輝くものを持っていく。俺には何もありません。それが一番の財産さ。自由を与えろ！」。

